

# イメージング技術を鍛え磨き、成長の糧とする

コニカミノルタホールディングス株式会社

取締役 常務執行役

杉山 高司



コニカミノルタが統合されて、早いもので10年が過ぎようとしている。この間に創業事業であったカメラ事業とフィルム事業から撤退し、事業再編を行ってきた。これらの事業の雄であったイーストマンコダックは、事業再編に遅れ、2012年1月に米連邦破産法11条（いわゆるChapter 11）の適用を申請している。幸いにもコニカミノルタでは、これら事業で磨かれてきた技術をコア技術として根付かせ、新たに液晶用フィルムの様な事業を成長させてきた。

コニカミノルタでは、材料、光学、微細加工そして画像の4つの領域で12のコア技術を定めており、コア技術を「お客様が商品選択する決め手となる機能・品質を具現化する差別化技術であり、今後も維持・強化すべきエッセンシャルな技術」と定義している。本号では、この中の画像（イメージング）領域を特集として取り上げているが、このイメージング技術は、コニカミノルタのオフィス・印刷・光学・医療等の事業分野で鍛えられた、他社で類を見ないユニークなものであると自負している。

この画像領域の技術動向を振り返ると、過去15年のデジタル化・ネットワーク化の進展で大きく変貌してきた。特に信号入力系（光学部品やセンサー等）と画像処理、そして出力系（プリンターや表示素子）がそれぞれ飛躍的な発展を遂げてきた。例えば、アナログカメラと銀塩写真で培われた色再現技術や画像認識等の画像処理技術が、CPUの性能や通信速度の向上と相まって更に高度な画像処理技術

となり、電子写真技術を印刷分野の画像再現（色再現）と遜色ないほどに磨き上げ、プロダクションプリントとして実用化している。本特集でも関連発表を数報掲載しているので参照して頂きたい。

今後の画像領域としては、二次元静止画画像だけでなく、例えば、デジタルホログラムのような三次元画像や動画を対象とした技術、コンピューターグラフィックス、ビッグデータの活用技術、或いは生命現象を画像として捉えるバイオイメージング技術、医用分野での医師の診断を支援するCAD（Computer Aided Detection）等が想定され、現在、急速に発展し新しい価値を提供している。従って、これらのイメージング技術は、ビジネス環境の変化に対応して、従来の事業分野だけでなく、環境・エネルギー分野、セキュリティ分野等、広く健康・安全・安心分野で大きな役割を担っていくと期待される。

企業が存続し成長し続ける為には、既存事業のみならず新たな事業への参入が不可欠で、その為にコア技術を使いこなせる人材と組織能力が必須要件である。環境・エネルギー分野、或いは健康・安全・安心分野での事業機会を捉えて、コニカミノルタの特徴あるイメージング技術を始めとするコア技術を適用する技術戦略により、新たな価値を創出し、社会貢献を果たしたいと考えている。そして、このコア技術戦略を継続する事により、更に新たなコア技術を生み出し、現在、日本経済の陥っている負のスパイラルを断ち切り、真の企業成長を図りたいと願っている。